



はじめ君、ちびまる子ちゃんのじい？に抱っこされてご機嫌です。ずっしりきます。もうすぐ3歳になるのに、はじめ君はまだおしめです。

※私の顔がデカイのではありません。はじめ君の顔が小さいのです(^_^)

そうなんです、私たちは毎日命をいただいて、ここにいます。感謝して生きなければバチが当たります。

これを見て、鹿児島知人のことを思い出しました。酪農をやっている、子牛を育て毎年何頭か出荷しているそうです。



その牛は品質によって、神戸牛になったり、松阪牛になったりするそうなんです。

入った漁港が採れたとこという、魚の産地と一緒になんです。おもに知人のお母さんが飼育してるのですが、やっぱり女の子だったら、「花子」とか男の子だったら「太郎」とか名前を付けてしまいます。「愛情が入るといい肉になる」と言ってます。でも、お別れの日になると落ち込み、引き取り業者のトラックに乗せられる頃には、子牛の名前を叫びながら、いつも大泣きだそうです。

82歳になる女性がブログに書いた詩があります。幸せになる秘訣…

「だれかに善きことをしてもらったら
けっして忘れないようにしよう
だれかに悪きことをされても
それは忘れておしまいなさい
同様に誰かに一度でも
愛してもらったことは
決して忘れないようにしましょう
それはあなたの永遠の宝物なのです



だれかを一度でも愛したことがあったら
それは忘れておしまいなさい
それは相手にあげたプレゼントなのです
その愛はすでに相手のものであって
あなたのものではありません
有形のものでも無形のものでも
もらったものに感謝し
与えたものはさっぱり手放すこと
それが幸せになる秘訣ですよ」



ほっこりしました(*^_^*)

先日TBSの深夜番組「情熱大陸」を見ました。残酷な「いじめ問題」や子供達の自殺が後を絶たない日本の教育現場。そんな中で命のかけがえのなさを考えるための「命の教育」を続ける福岡県久留米市の高校教師、真鍋公士さんの話でした。



真鍋さんの授業は、専門高校の食品流通科1年生を対象に、一人一羽ずつ卵からニワトリを飼育し、成長させたあと屠畜(食肉用に殺すこと)、解体し、そして自分で育てたニワトリを食べる

という内容でした。小さな命を育み、いただくまでの過程で、その重さやかけがえのなさを生徒達に感じとってもらうのが目的なのだそうです。

見てて辛かったなあ(>_<)卵から雛にかえり、かわいいひよことしてヒョコヒョコ歩く様。3ヶ月後のひよこの最後を知りながら、まだ16歳の生徒達は飼育に励みます。名前を付けたりしたら後で辛いだろうに、大きくなるにつれ生徒達になつてきたニワトリは、生徒の後を追うようになります。

そして、その日が来ます…。

「やだあ〜」と泣き叫ぶ女性徒。ほとんどの子供達が泣いています。放棄する選択肢もありますが、全ての生徒が自分で育てたニワトリに手をかけます。首のないニワトリの羽を剥ぎ、肉の塊にしていきます。そして、まさに「命をいただく」時間になりました。その中に、笑顔が見られたのでちよつとホッとしましたが…。